

横川末吉先生 (二)

山 本 保

佐伯惟定

横 川 末 吉

(会員・佐伯市池船町)

惟定が近づくと、何とも云えない、親しみと尊敬の入り交った顔で、若い大将を仰いだ。真夜中に微行で不寝番をねぎらうて、手づから暖かい濁酒をすすめるのは、もう長い間の惟定の習慣であった。「御苦勞じゃのう」と年若い主人から声を懸けられた武士は、身に余る情に只涙ぐむばかりであった。大将としての資格と云うか？土心を得る道を、惟定は生れながらに具えていた。惟定の澆刺たる元氣と、勞りの心は、佐伯氏の武士、特に青年層にがちりと喰い込んで、水火の中も辞せない決心を持つ者も、決して少なくなかった。

例年より少し早い霜は、大手門の石畳にもうほのかに下りているらしい。不寝の武士が吐く息は、白く燭に照らし出された。惟定の立ち去る足音が、本丸の方へ遠ざかると、もとのように静かになった。木立の中を、古市

の城下に下る大手の坂道を、目を皿の様にして見守る宿直の武士が、ぼつんと取り残された形。

本丸の離れには、惟定の母の部屋があった。

重苦しい緊張の続く今日此頃、いつも寝られぬ母はまだ起きているらしい。「母上」と明り障子の外にうづくまる俣を、快く招じ入れて、母子はじつと顔を見合わせた。お互の胸に在る事は、語らずしてお互の胸に通う。

「母者人。明日にもあれ薩摩勢が来るとも、戦の準備は完了しています」

と語る我が子を、頼母しげに眺めた母は、夫(惟定の父・第十三代佐伯惟真)が、日向の耳川(天正六年一五七八)で、日薩の軍と戦い、敗れて命を落としてからこの方の年月を、静かに反趨した。

天晴れの武將に、雄々しい若者に……母の願いは只そ

れだけであった。惜しからぬ世を吾子の成人を唯一の楽しみに、身も心も捧げ尽した尊い母性の姿であった。

荒々しい戦国の世に、強さと知恵を具へない城主程、みじめなものではなかった。現に大友の宗家義統(第二十二代)がそうであったし、片っ端から統一の血祭りにあげられていた。(甘やかしてはならぬぞ。遠慮しやるな)と、上は家老から下は奴婢に至る迄に気を配って、惟定を盛り立てた。心素直で、心雄々しい若者に、人知れぬ山程の期待を抱いたのは、母一人ではなかった。

(おお健気な、頼母しい)と、時には抱き締めた母の思いも、容易くは口に出さず、父(惟真)なき後を受けて、秋霜烈日の硬教育も、母一人二役にやっと今日迄に仕上げた。積る哺育の労も並一通りではなかった。

「いえいえ心許してはなりません」。

母の凜とした声は、惟定の心をぐっと引き締める。

すは薩軍来るを聞いた時、心揺がぬ武士は決して沢山はありませぬぞ。十何代の間には、佐伯氏も血を血で洗う醜い争いも、少なくはなかったし、一体に大義名文よりは利益に走り易かった人心は、大敵となると割合に頼みにならなかった。女心のち密さと長い年月の苦勞で、

人心の裏の裏迄よくよく母はのみ込んでいた。ここ数旬の間にくっきり落ち着いて来たが、心勞のために、多少のやつれさえ見えて来た倅を、いとほしむかの様に眺めて、ほっと密かに息をついた母は、

「惟定殿。御身も妾も、此の城を枕に討死の覚悟しやるがよいぞえ」

と、決心の程を示した。

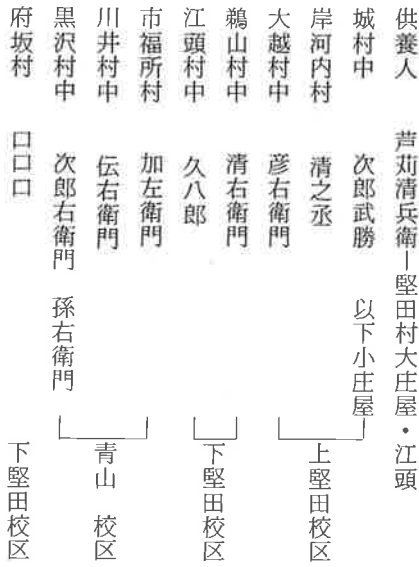
父祖代々の名城を守り、孤忠に詢ずる覚悟は、すでに惟定の腹にはあつたが、明らさまに母より語られた時、一切の疑惑と煩惱は、一碧払うが如く雲散霧消した。辞し去る惟定の胸には、明日の戦に対する勇氣が、こんこんと湧き起こった。わが母と在りと思えば、又外に何をか希(や)まんやである。

倅を送り出した母は、長い事さびしく考え込んだ。

注

天正十四年(一五八六)十一月、島津の大軍が攻め寄せた時、梶牟礼城主佐伯惟定(第十四代)は、堅田谷に迎撃して大敗させた。その最後の決戦場が、大越川上流の長瀬原であったと伝えられている。

その後、この付近に亡霊による異変があったので、貞享(じょうきょう)五年(一六八八)七月十五日、岸河内区と千人塚とのほぼ中間地点で、道路わきの小高い岡に「三界万霊十方至聖等」と陰刻された石塔が建立された。つきの方々の芳名が彫りこまれている。

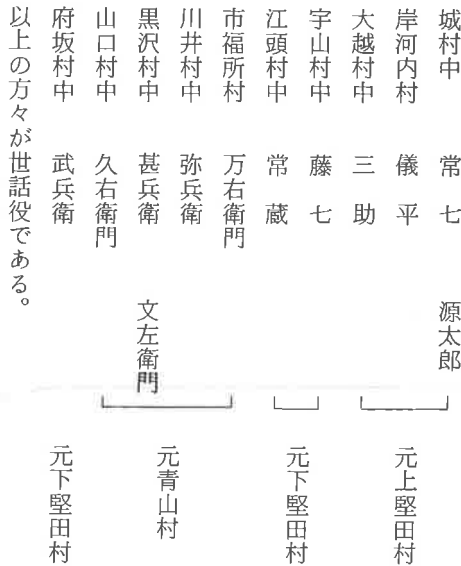


また、文政五年(一八二二)に、次のような供養碑が建てられた。(別名千人塚) 場所は長瀬原。

「日輪当午塔 万霊」

時の堅田村大庄屋(名字帯刀) 芦苺八郎兵衛惟繁

芦苺為五郎惟延(江頭)



さらに、「三界万霊十方至聖等」の供養碑の近くには「かがばくばのお地藏さん」が安置されていて、岸河内の耳塚とも呼ばれ、耳の悪い人がお参りすれば効験あらたかで、この耳地藏も、堅田合戦と強い結びつきを持っていると伝えられている。

前記二つの供養塔には、天領(幕府領)地域の津志

河内・柏江・汐月・泥谷・波越・石打・西野・棚野などの各庄屋が関係していないことに奇異を感じる。

明治三年ごろの天領（幕府領）庄屋は左の通り

床木村	庄屋	河野四郎兵衛	元明治村
汐月村	同	三右衛門	
柏江村	同	茂四郎	
津志河内村	同	忠治郎	
泥谷村	同	儀之助	
波越村	同	善兵衛	
石打村	同	清左衛門	
西野村	同	弥十郎	
府坂村	同	猪三郎	
棚野村	同	万太郎	
			元下堅田村
			元青山村

天正十四年、島津軍は二隊に分かれて（肥後境と日向境）、豊後へ侵入した。

島津軍の前に、大友方には内応して降伏する者が続出し、無人の野を行く勢いであった。

この年の十二月十二日、戸次川合戦（大分市）で、

土佐の長宗我部信親以下七百人余りが、壮烈な戦死をとげた。

昭和三十九年六月、横川末吉先生は「新編・戸次川合戦」を発表されている。

昭和五十三年三月十九日、発足二十周年記念、物故者会員慰霊祭（於龍護寺）後、次の方々が逝去されている。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。（敬称略）

近衛千代子（東京都）	益田	学（弥生町）
横川 末吉（高知県）	安部	庄一（鶴見町）
毛利 高棟（東京都）	広瀬	恒太（日田市）
深津忠五郎（佐伯市）	中村	義雄（佐伯市）
平井 常人（佐伯市）	柳井	勇（本匠村）
山崎 為一（佐伯市）	木許	善助（佐伯市）
高橋 長一（臼杵市）	月本	策弥（藤沢市）
市野瀬善之（弥生町）	穂積	英雄（佐伯市）
宮本 清（佐伯市）	織部	利雄（大分市）
加藤 文彦（佐伯市）	曾宮	衛吉（直川村）
田北 大善（直入町）	大久保正尾	（日田市）